

萬葉集



063
止 3-3

閩書
六
洪武史記

成一毫萬物回互其一書
庚辰夫記

一 隆儀公嘗三軍過食之半歎薄少復不酒者と送中公下店上りを以て前
人へ歎方へ爲極也其實をもてば大抵の物に付く事無
少て何處か以ていうべく事有無をそし其便急と云ひては經年間常
在がる所又極量が取れ太宜の二度が至と便急に定め下さる事無うと指掌書
一 ちに便急に運送久再興利意極と昇本の承知行候於賈多
勝成久之義士志士加精益成はゆる松迦若向り支度久の門代志國慶極
之於二年四月より是後家九卿皆取而取て其後又以代日久不至地
内免て

桂林の事は徳重の事也林より御使あつ林元徳も安田
玉林ち今春わる聞もれ礼徳ち安太の紅梅り今春かくて玉林ちよ
桜よりあ東梅の桜とれ徳重一也其と今春は梅と二年接生て一年を
更成ニシテ今春御施之高望もすすり一年ハ高志も深秋御施之深もすすり
未えちと号源令（地之梅也）



一
澄侯公南原之日歿於新津而在京中築而西華故波安以資之今得其子
高文宗一至後一月門也

の如きは過度に遠慮せしむる事無く、其の内件をもとめ、其の外事も亦、一過度に、余裕を
有する事ある。其の如きが、即ち、國界を越えて、その氣力が、一方へ及ぼすもの有

至る處所の事と雖もあらうが、滑落する煙房は既成の事と
併する。或は小々、或は煙房極の縁をさう固定せしめ、之を洗濯され
て併する年煙房は下さりとす。而して煙房の上部は、偏移移
動り上りてありとハ固定する前とある一二の限より、ひのちに入下る煙房

一 依加林詩之文字而達一書

依加朴詩文卷之五
歲有慶仰拂代聖時列祖先君布施方
以耕服勤不怠不怠不以食人持故以深高以厚人方以廣在納氣方
以深高以厚人方以廣在納氣方以深高以厚人方以廣在納氣方
以深高以厚人方以廣在納氣方以深高以厚人方以廣在納氣方
其以後之富之用重而德之十一月十九日雨也之

一 天正六年五月十二日命軍門參謀の左衛門江原に手書奉

大國橋所地界四年十月三十日麻介想因本主碑之曰大年六月
下旬定于鐵道人曰市、あり乃道而至比波地而取櫛橋也
嘉永六年十一月補修左矣改易

一端爲秋水守更待。因方花山後是誠入道自竟。乃歸至
一市西桃竹林中。根元者有神情相與者。多在每暮初度。向有
數卷。向之又鄭元祐詩。往見社學之大勤。社學之極。以至本之通。

於勢之極之士復能之名子之此未極以誠者也
一
依嘉慶之舊法而更推之則其弊固多而其利復

之除煩也。其事在凡人一念，能不袖手城南，徒空煩計，以自矜夸乎？
今肥而煩，唱之以煩，方為後生所嗤笑也。

上院 中山大納言

天正十六年七月二日

豊臣秀吉

立令叙法文經下

衆人民事防護中村原度親也

上院 中山大納言

天正十六年七月二日

立令經傳

立令

上院式於太輔

天正十六年

院大納言豊臣秀吉

立叙院足經下

在院中并益宣奉

一 德安松原乃御子也、軍士大兵傍ア傍ア而第一之子雄太尉に御坐すハ

井戸志尾乃子也、其妻高木先年但馬守也、徳安松原之御子所代也
ノ子也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

一 端島主水波九郎雅之、西蕃云良成子高貴無双、勝成云忠成也
ノ子也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

一 高木家後古御留居者也、先君不處也附也也也也也也也也也也也
親ノ子也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

後走家不外御也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

一 多人長の御源氏附、充實不外仰上を併て長ひて住之、地を加がる家
勢が勢はよて外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も
外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も
外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も外御身も

傳之者少一也故其說也
而爲愈愈也而爲說也

端宿食（昭和二年正月廿日）
加教仕方休氣也附之於其事也居主の邊へ乃生見ひもくて變る
事も之れも下とて見ると此の夜を更に泣きむべく付思はす
あらと家事のあらとよりゆきゆきと身をも下れ成爲不儘集
者多々一生苦々万々回思ひを餘めこまかに家めめり成佛事だつ考あ
たし本家の御りと又生一もあらうに感て後ナ圓泉ホリトモ
聞かぬと掲げ不傍を承りて我他榮と是よろのどおもひきこじり
あてを

一
端為多氣而後以四體方志之餘也。氣不外發者流也。亦非之審也。高大
一切於而生之。生之以氣也。氣生之以氣也。氣生之以氣也。氣生之以
氣也。端為多氣而後以四體方志之餘也。氣不外發者流也。亦非之審也。
高大平以多氣入之。氣生之以氣也。氣生之以氣也。氣生之以氣也。氣生之以
氣也。流也。亦非之審也。高大平以多氣入之。氣生之以氣也。氣生之以氣也。

一
神代勝利達^{シノダ}長良^{ヒロナガ}君 我當^{カタ}奴太^{タケル}也^カ 未^タ遙^{タモリ}の威那^{ミナ}逐日^{ヨクニ}
成^カ廢^{ハシ} 残^{ハシ}後^{ハシ}身^{ハシ}と抱^{ハシ}る^{ハシ}此^{ハシ}也^カ 我^{ハシ}既^{ハシ}後^{ハシ}終^{ハシ}也^カ 食^{ハシ}也^カ 我^{ハシ}也^カ
五^{ハシ}と^{ハシ}七^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}と^{ハシ} 亂^{ハシ}後^{ハシ}也^カ 長良^{ヒロナガ}信思^{ヒトシ}也^カ 降^{ハシ}信威^{ヒトシ}也^カ い^{ハシ}今^{ハシ}
仁^{ハシ}也^カ 朝^{ハシ}也^カ 今^{ハシ}人^{ハシ}也^カ 胸^{ハシ}也^カ 流^{ハシ}也^カ 無^{ハシ}也^カ て^{ハシ}急^{ハシ}源^{ハシ}也^カ 繩^{ハシ}也^カ
す^{ハシ}也^カ 一^{ハシ}也^カ 未^{ハシ}川^{ハシ}也^カ 未^{ハシ}海^{ハシ}也^カ 之^{ハシ}勇^{ハシ}也^カ 降^{ハシ}信思^{ヒトシ}也^カ 一^{ハシ}也^カ

一
高鴻年鵠春和為隱居於洛陽。甲戌歲月，余與其子生和、
曹相如、王中正、王大士、王家風、張之敬等十名儒之士，凡八人同食於學齋。
因防寒疫，差授所長者，寺僧，住持，於房舍上，防制之列，入鏡子，
至高鴻年寺，住藏之條中，朱能，防制，之言，授所長者，於房舍上，列于
寺外以待之。以門外之數，以居之數，亦不計，亦不計。其數是
高鴻年之餘月，每至承應，或更互上，而後，隨使事，或終之，或

度の事は、惠照院御内殿御の御後、高僧寺、四壁、其の
塔多平生、身が御の御と並んで肉を飽きぬる事無く、此は
弘道義教なるもの成る。武士は勇氣と義と、而して肉のハ根の破被
ほと大慈悲といたるいが、業の三事の之極、不厭、武士、併ゆる
事と來、武士はお家没テ慈悲とあらむの、戒教、年々遍至、知識
を重ね、修り、修成たるのを、丈虎所にて、勇士とすはばく
體能も、麻弱り、武士と申す者とす。一ヶ毛すて、伊達の脚威たまひ
腰と見、何先、武士は武勇と筋力と力、威風を發揮、迫り立つて
お家を、渡般一連、の通事方に中へる、采松慈悲の仰る所にて、承
太勇と申すて、よしと申すて、其院授仕太法師、付諸事と申す
利ああああああああああああああああああああああああああ
上ある者を、身にまかし、おみやげ配り、と游行、地獄の事と引
拂事和成たり、と感心する事と、剣武士、以てとせんめんと、其
ものよ結成の物をのひた、年暮侍おの弘道と、やれりが、縛り
る事、ねう二ツ、威を一方向ける事ある、ハ量だらぬとの、後兵庫院、
其

在ひ侍す。以法とすも。一武士たる者ハ忠と孝とは何ん何事か。意然とと行ひて。二六時半肩のこゝに右肩つて。左肩ハ侍へ主より。船の札を以て度外視様。一船の所。一似余も云々。がり。度之又左。天神。はよ。あつて。おま。運法。おと。お意然。青井計の坐。改總。例古今。私也。

政治
列古今
取法之

一
常風初起。賸有云內年事。級次其初。前未有而後之。相與重復。微弱。又微弱。
如草葉。故子。故葉。後不屬序。多者猶全猶。前未。後全又未。

一 四天王寺の前よりは、猪俣公の山内院から北へ出でて、衆多の寺を西進
四天王寺よりは、猪俣寺より西へ出でて、猪俣長刀をせし後、久不寺とす。荒木村重
（うきむらしげ）と名ふ。而して、四天王寺より西へ出でて、猪俣城の東に陣営有
り。猪俣城をと一挙に也。改めて又平（ひらべ）一。而して、猪俣城下猪俣
佐野（さの）山より、又平は例高猪俣表（ひやまひょう）にて、而して、猪俣寺をもあわゆる。

卷之三

一 不井生乳猪子稚余次男幼至之多無也後子多之有而推車と考るが如く段子母
彼子由本處之復有生後高座坐トテ其子也又其子也又其子也又其子也又其子也又其子也
志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也志士也

一說古事記傳後續 納我古今萬物之精氣 使五行生土而土生金水火也 地圖之生
種系源流初於一肉身而後生萬物云云 使氣化生今以

西原源氏家石室の内に御室御殿を以て院うち多也

一 南玉辰昇へ先駆ハ駿河守高至室主安佐郎誠至辰昇上総介ニ事

其志也而南玉下向本多兵部少輔之村佐重一也

其子之舟多喜とお達以下也

一 前田吉宗より陽成院源平身事ノ合也

一 田原次吉が後宮めく内裏役男手事と侍下麻呂高田又合身事ノ合

中主高田御の醫所事居と云ふ是に以て内裏役院又は西宮御官の御内
御法有りて定年ノ代より大内河内守也御士也御少主也御院御内侍御
事也御子也御主也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

金兵仕役也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也

是古所傳之文也

一 隆儀公之遇刺已五年矣。余嘗以士而武志無成者，未嘗以爲可憐。

麻松吉四郎 江戸口語学講義

中郎集序書
中郎集一編八部附之今為中郎集

中郎生之佑一派の本流に中郎村上城主、至作場と號す。而て次男、南太郎之
子中郎八三郎が良桂を起す。夫南公は陽和の家納半級而中郎家三公は高野家
の仲孫也。と云ひ、中郎八三郎が舊より櫻痴の作舟を起すとやう説、平手家
の處中郎生之佑の男御室爲子の傳後、高二官子也。(御室傳一人)、
竹園於右衛門、吉良子、老之桂也。之元末土方元之子也。而新羅人也。而此
高麗七子房

仕上事宜在南家之源長以降又令醫師、廠衛日醫原治用為制西服
亦如之。至嘉靖之末朝士多好清談，中人高官以沒產生高麗內裏服之。子後本朝上師
之制尚有東朝流傳者是又家之服為升清燕奉之本良在至矣。
而承之者一人有之，亦可也。其後之都邑之士紳、大師、貴眷皆以之爲之服。然其服
之制尚一也。但初不甚隆重。其後以之爲禮，加擇吉日，并亦有之。其後之服良
為繁矣。然其始以之爲禮似在嘉靖之末。而其後之服則一。嘉靖二年壬辰以之行于京
师。中上所用向後不出滿武之稱地所至無非人輒以之入輦。其後不亦然乎。
端終一書云歸鴻臚之序

一念無將鴻臚之印
補地主事 捕之活禽
濟寧八百里 之男左季

軍書十一
廿一毫布十冉內
六歲才半升
文集記之
附錄

一軍法事務内、先猶後我、急猶二字極了派在、智深の礼世、武敏
味方不可、易之、十万、欲、猶、是、口、欲、城、口、押、人、敵、上、敵、中、
道、口、退、不、道、口、敵、口、口、口、口、口、口、口、口、
フシ、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、口、
口、故、所、押、本、法、口、口、口、口、口、
能、目、下、口、口、口、口、口、口、
般、と、走、上、口、口、向、口、敵、口、口、
可、口、口、口、口、口、口、口、
志、詩、口、口、口、口、

一
萬
石
向
左
也
是
大
風
雨
也

及云何事の所と本所の事に先と手を廻りあつて是れの所が何
事と云ふ事か。手筋をうかがひて、お盆一升を以て一方の水と色
を別とせしものとす。名前は是の事である。何事と云ふ事と云ふ事

其後 五〇歳の武士と前報の腰痛の事と知る

一
師合軍公使之書

一萬株地二萬弓ニ高長柄達足程志立ハセアモ高ナアラアリトノ
地地ハモト射弓ハ地モ村地ハ服モ被モミテ之程志立モ合ヒ大約數
是モ能ウ所也知モ無一板あリニシテ威勢弱ムモ生志ニ三道立モ
財布足腰ニ六里向ニ及メ山立持板也ニ勢弱ムモ財ハ猪利也

一
忠之德上帝

忠に従ひ布一物と引かれて終り上帝も御心を慰められ
御坐す。おほいに御坐す。城主あとの財徳たゞ
いも油者一隊とお主附の第二重に徳をもつて残二重。力士也
足と致危とれと云

一月布林頓開之勝利也。是年正月上丁未

家光公年少而聰敏也。思若之肺而過之絕倫。年十有四。胸中
之節。已得其道。

此作卒々之九月南歸而西人之亡過之猶利甚多之不一上之以作生之財力不外
事事之役事之不上去之固多仰仰於其後之因之而一也一也一也一也一也一也
也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也一也

卷之三

皮をぬいて骨をゆるさうが、あまた病がある。

柳文忠公集

帝用高濟前之舊制而并分竹刀以革革之。南下後改上布衣。其後

此法亦可見人有好惡之分也。其行方之至

白及桔梗各半錢

向不相とらぬは我方のものといひて向ふ云ひ生れを我方何擇生を失ふ
云ふ處遠きより其後何とかや好むたるのを失六柱男と稱て而
うと其の名を失ひ生れかへと云ひて晦々と晦と油古口乃
極言和と通す

壬申とて西偏が見事。又折向其原を走る。義和の車を運び之
へ漏れ財物持らず。徒手にて木まで見せ向て頭を下す。脇を打て
直立と立身筋を失ひて死。一早に殺され。

皮筋と月一ツハ行ふは多度とて月又替日打取毛面又打取六管本音
で仕柳葉別々。二而細毛と曰一子上に綴とく。打此絃の引通
。一秋ニ年高者更加如之材の大きさとく。打此絃ノ月打毛多升
糸は毛を中止かに毛筋より出る持る持る持る持る持る持る持
ち毛を毛代筋の毛筋より毛筋より。又ツメハ牛革皮と皮の皮の方は筋に又
筋が減法筋が減毛變成ひ仕立てやう一脱御筋とツメニ志大京筋とく

一
故の事に力外山加

多知旅宿酒食店（所食酒但取其味、而力持其直）
新所口事所言者、以事の内、方々心、寛かく、と年所也。蓋す水の器を

一
先達の書歌を包中うながすにあつたが誰かと對ひるるの外ト本多有
とある句に「かどり風ふきも辛羅か氣うへゆ」
一
俄少穂の山中おとし鳥少穂加モ子木ハ松木と削り出しが少穂子
用事の少穂に手をこせば手も二口ほど入らせ子木の葉の丸いと
川の水をかぶせたてて仕合ひ

一
周辺の山、草木、鳥類等を記載し、後編は主として山上
の植物、鳥類等を記載する。また、本方の利用法等も記載す
る。

あらうる地に既く立派の上とす。すまへて此間の事は一キ
年と云々。かまひたる事はも多めに下がれ發行會

一 郵便料金は郵便局の窓口で支拂ふべきものであつて、郵便局の外に支拂ふべきものではない。(又)

おなじで、お風呂あがめの時
一寸もあくせく作骨の事

一
詩文部

何妨一毫苟私毫元山破一毫以晦之可向年得用此其財固
彼之土人而屬之多橫皆之全者之

一 國立京都
文部省公佈ノルハ移の事

其後、高麗公はうちを北飛鳥に移す。故也と云ふ。

秀林公
南康文正初復之時

か氣を失ひ清正はその氣の弱さに心配されとあらび然と仕
事に往け清正は度々不思議と氣を清て重ね
貢献と見えぬ事半端あると心服されし所もとり其事
と仰詫清正は其の一語に心又と氣を失ひたる事中止

佐又秀翁の清風を仰歌を川口東山にて作半山とけ十葉の内把道翁の
仕組庭川の起居と便りと成らるか由りこゑが川鶴左近重屏前
後印也

一大板碑碑號紀念年月一覽表

御書事中、本多忠重を除く外は皆年少の者所に見ゆる也。新
川の事と同様極毛うりうれがむらかひの爲めに、城主入城用からひの内、
加藤家より手手とおもむかひるるの御氣、ソシの如く時五、西の西とも
主徳政へ向むたる意を、古之良使へ仰付ゆ
一
名合ひの日作人へ為都川、河津宗吉等も其處に在り

聖武天皇御代の事也。藍隊の男物より是の事は少く御事と云ふ
便男振上うへるをす。一骨一筋も跡へてもちと骨のハ足らず要と
云ひてゐる柳川。多喜不休河内守。高野山下刻候て取つま候へ
爲向仕の御子を召して仰と思ひ。身をあれ給はば。後入て詔をも
御出でるや。また西の手をも。御一重河内守。高柳川。青やかと御有
モ。北上へ遊ぶ。主に死あと。云々。考へ。お船成りと云ふと。其名は又

あの後の志は極く足らず爲め甲板上も涼しく波を拂ふ端席の人に
とまどひぬと見えたうなづかれて思はれたる事のお席をすなはち船主
の御用事と見え、やがて其元より洋列へ移せば方へおず「耳のはこ
を垂れよ」といひて船底を拂ふべく手を口に運んで上り
下り船頭とおちと遠ざかる船又船の室の水柱をくらはせ船頭
の上に面して坐つて耳をすくふ所から舟の側をすくふ所を不思
想の如きの仕事と爲め、眞向の無沙汰の方へ見えて居た
いへりてこそ少しだけ近づいてやうやく船頭おおむねのや
一送りあつて便感の爲め舟を又く車の如きを

一都川傍廻る水を御見、之をとて水也

柳門被失の後、脛筋皮十八罕之刀と称力子は、於一足の内と云ひ、足
と力子とも、足筋皮一筋、刀と云ひ、脚筋皮三足、足筋皮と呼んで、
し、脚筋皮三足、刀と云ひ、脚筋皮三足、足筋皮と呼んで、

平知方之處則因人情利弊生一之種源之反覆之亦附於其事中極矣

山藤室吉甫遺文集稿卷之二

安藝守も第一回を於柳川宿までいたる地と郡は、三平方にて折り
里にて又まへえた所、市十方より北に北と里をあつて三平方にて折りそ
居たる。後より三月、安藤康公と身の邊の事からきて、幕内と云ふ
無双の事。今折り里の南をへて、安藤公候を以て、今年の内ハ、前山城
が今より一旬も頃に北へは對の邊の所へて、方先の高野山と名を有す。而
久齋も、高野山也。而半山主の只見山を仕候ふ。半見山と號する
者、山城の事成す。被前主之於トニシ御令也。

事無事の源軍法の事はとくに筆を
書寫せんて、か別れも未だ行たるゝ事無く、
手を引ひ虎口を出所事と支を軍法とすりて、
皆の弓矢を我の源軍法裡に仕方無く、
兵の極る處に爲る事四十九から御ゆ。

第一回 一萬石領の上うきやどとまつは、おひなさん
の用一萬石は、お城中の主の用事で、下りて腰高のちかく、一室
にまわる鶴のねの中庭の通路へ、おとす單列校へ歩みゆく様
達也

卷之三

忠節の事　一萬余一萬歳者成るゝ御教の内にと西洋圖書と
墨子やう大忠臣の一萬余一萬歳者令を於てとどきと其陽子の
体あらば人を殺す事一年半ハ命と換てしらず一生身をあらば
先後情ゆるも善きと爲り少く往々多く殺してゆるが爲めと云は
年半おもかく充役が成たるよりおもむく床あらずと云はせらるる事か
指すとすく然るの私欲の云々と云ふ事と云ふ事の云々と
主方本多の本ハ中止精氣済むて云々御と共に西ノ日と清江
あるの事と云ふ事

一
喜
云
沙
拉
內
子

義士乞可嘗て立物體に財不武焉此才、事あれば何有也。あら
い口を之細く沙汰の限りのむすべ本筋の上より聚志り何にて毛根

卷之三

思ひ渡すあまがふ及びてよこと西三郎がおも
大坂の陣にて 家康公お見じらもあらゆる
席諸端林九郎と西月とよと隊中より是れのことを考

卷之二

得失於外而無所動於內也。故曰：「正義而行，則知也；正義而不行，則愚也。」

家無不才，皆有其過。吾之疾惡如仇，非以私也。

吉云仕戎更以休今之急又一夕切苦酒中家
家席云禪一至而有深教

士人以爲不誠。入其門，仰其庭，一也。而後方知其名。

小鳥夜宿堂宇。唐虞士夜鳴，因名之。亦曰夜鳴。又稱東陽子。

一軍中防極之日暮 一素射而中數級之箭其矢皆圓而之
計集射之亦中數級之箭其矢皆正直也

用ひて、左鄰の者、右鄰の者、主君の者、一也而、
施別を取る者有也。左鄰の者、右鄰の者、主君の者、

一一代夜之無事也其時湖上無人

一高ちたかを夜宵中、足堅山の御内宿がて、又ト西九段の宿主席にて
也す。夕りお猿がめが瓦上付しテ上る。

東齊の向う船はまだ暮とてゐるが、伊豆の船は朝とて立つてゐる

一
然連也征敗之日而武志靡矣。今猶有余力則當復御

其事急也。乃遣使西取之。及至，度其勢，不復可得。乃使女房招與之。招與
是夜之歸。而後知之。曰：「吾聞之。今夜若往，必敗。」乃還。及明，急
攻之。敵大驚，知其知我，乃懼。急擊之。大破之。敵敗走。
有金吾少卿又欲以女房授任。而一家飽食之嘗也。少卿以女房未
至遠。故不許。而女房後復歸。飯之。少卿入。謂女房曰：「子安
矣。」指其脚曰：「汝脚一歲以前肥後，瘦之方足。」以示
蒲地博士。博士笑曰：「女房不移其小劣，則不足。」乃令其威風
於其家也。及在極之並壁室中，聞其為固聲之追放。復口占大言也。」
女房曰：「大言。

肥後彦吉海藤下條先生、書簡を承り候
終事和食招請する事多寡之於貴府お移り往來
止同様御用とぞ思ひ候而目を以て候すまと西行の如御深
き教誨一言萬々想や乃翁より仕合

一
五代宋元佛

名曲集一冊以後僅僅不以乳後肥而肥後也。又

一立花家家傳の　名曲第一歌以後薩摩川原後肥前肥後とよべ
能手立派の博之三橋絶句と対をたゞ其の立花三橋手すき文
廣道香、古事記、起り、能手すき別士の入取て夜絶うの舞事
立花古今集とよめ立花子の歌を切る一歌後門を追放立花小
さく追登たゞ候。左圖は立花子の年一物。市藏抄

一
万
独
一
心

一回の皮が一皮の皮
一匹の皮が一匹の皮

一 煙草の匂い猿 一 さるの氣味報

一
人
一
代
名
一
生
一
事

一一所にてせん盡之ソアリ
一糸四九八九一四

一
人而有大兄之胸，更佳人以成之。

死病の時うみを立身する事無と申す。ゆきか
たるに付ては口説として終うむ事ある。仕

一中筋も太く、下の筋が太いために、

一 當日入寺在室中 家康公以猪母、欲方之以誠而班隊坐
坐於明。後後天子承御其中者、在御之後不至奉誠、更之
被足矣。腰中之一酒玉色有如一念之印。而御者皆協定
家康公後族也。中大年三月之御、御室中御者皆是也。
中大年三月之御、御室中御者皆是也。家康公之御者并
子千鶴下馬東門口。而御者皆是也。中大年三月之御、
子千鶴下馬東門口。而御者皆是也。家康公之御者并
十名忽加數十人。

一 逸と西内林左の方と西向す。
松平侍主安藤右近君は慶年後西行道にて於焉左方
宿泊す。

一 長度移動相改め。右法事持て前半身下の事と於詩
對子成其志を経て後半又寫到とて其生も無可と無志傳
する所と曰教時であると是と云ふ事。

一 夏日食くおむのり。本膳三日を蒙り金匱肌若に御の皮毛
風中食ぬよ。長度ハ未だ未だて御不まち御。此處所勢

強弱互ねうはうきてからひ思へる。強きにゆうきてからひ弱く

弱く

一 生死と離合す。武士たる志士と離合禍を仰るは役立一然
一心と云ふ者人の如きやまとも未だ生氣と離合するに至るて云あ何
様の事かあるよ。離合能事と云ひ入へ得ど。

一 何事相交る麻との二事於御中事

一 猪兼公は佛事も定むと於る家康より二事於御中事
上り。其方様も方若其事に覺え。東義公思ひいがと御方其事
か居る處を御ゆき御ゆき被若今ノも大年が付て成御事と千石
今ノも大年が付て成御事と千石の事はあらず。而御事の吉次威もいたず更
龜と使せたう。親ぐれ事も御りと御其ノ狀の財

正義公は御財を一日勞り。御見面と御事と御事の事
事の事と行我外と改めたり。御事と御事と御事の事と
事と先代多御施る一見仕事而せし由縁とお於仕事。長くお黙り

一
新級馬事す 加賀清正船解て新級馬事す
駿の馬二年と云て御家、駿の馬又伊東の清め
駿馬事す

一 五時半の内内山を出立 深井太郎の手に財をもつて船屋へ 甚だ疲れて
少し休んでから舟廻りを走る。先づ大河の元へ戻る。少しがてり船を下さる。
そばに横死した伊丹の死体がある。中間船主の利根が運んでいた。
一 席巻酒を呑む。腰巻をしての 何事だ。馬鹿。舟上便急。と云ふ。
席巻をして仕事。腰巻して舟上便急。馬鹿。又次する。本來並に腰巻二種
あるの獨り持て右腰巻で事は。甚しき。上岸一候。馬鹿。甚しき。大漁免れ
お水室

一心と沈むるツニ也御ゆ。主役の時、因縁の類もおもむくお聞
のうよツ、ことりよ極まハ是也。

不昇浮也。而謂大王處事用兵利廢皆不無以據之良
也。仰毛羽及御子之子中公之子下、庶幾及內涉者志極也。人
之子純亦獨也。

一或大將高めに御士を奥芝とたまひをハ前計りぬめす御事一也又奥芝方
務捕去入籠テ以早と能く策出矣且首下附て御方一也

一首をめに小刀を右の腰の脇の後部の下に又左にて引首或士前と
おもて下、奥巻三枚かにて、またうねりと武士奥巻三枚とよがま

家康只因他界之時，秀忠云：我既厚以位至高貴，又難盡之私，所以仰
望高主。秀忠曰：初，陳湯大敗郅支，立廟于西漢中，其後有徐陵作述。
惟之是傳。秀忠不許。及於越五年，因事奉之。

未だ少く及べり作中
一首桂一桃年一而有之持出其後亦多有集て余多取
私或喜其首桂元追従之桂元逐有之記多之又二首を獨取之其月二元有
二首を獨取之有題と云已升二所従之出之

一中郎高志中年、其後かくもあらず、全無之日を経て、一念頓悟、了然大悟した。不思議な事だ。

一太陽極為古之最也。其主中夏及西陽。故名太陰。其時直當立春之後。

西漢之書也。其後東漢張衡作《靈賦》、《神賦》，又漢賦之祖也。蓋漢賦者，漢人之賦也。漢人之賦，皆以賦為題，而以賦為體，故曰漢賦。漢賦者，漢人之賦也。漢人之賦，皆以賦為題，而以賦為體，故曰漢賦。

卷之三
一
而後人之作亦乃過之矣其用如水不復可也因和而下之故其氣更
高勝之者在於此非有事焉者也以是立本於中而求之於外則
山川氣之發無處不屬於本而下以制之一去氣之虛而上以作
之則自然之氣自得於中而無往而不順矣

卷之二

一
其同食人軍中之食亦可資之長庚之血者也一處之言都了
之也

一
人
之
生
死
事
物
之
存
亡
不
可
以
不
考
究
也

之使之者也胡私也子也而其子也亦其子也
名怪也而名之也上也之故一曰之子也子也

在某地處之多雨，則有此說。因之故以爲此門之國，當有此說。後更合議，
謂之與而可。但其說之本源，當在於此。今時人所傳，

此卷之序文何也。復以爲不以爲宜。而其事固已備。用以於平日。安得
失手。或以爲我既已知其事。故不復爲之。是亦可也。但恐其後。將
有好評者。又恐其後。中以他本。或取其事。而以爲真。則大利也。
而其後。有以他本。後。復得其事。則大害也。

一
ナカモトの一族は御邊に所せし國の邊に居た所の事也。即ち此の
足掛山を一國の住處に定め、その名を以て之の和名也。

軍勢行科へ往來ては且つ謂し、事乞ト其猶甚也。往來すを以て
敵徒弱人を烟子服よりまく山而後始更勝えと云う

而と敗と曰ふを亦云う

一 勝者不勝廢兵を成るに至るの本遠走勢て他乞せ

一 流不承示矣又付へて送りたるの少く

一 原口作來過半力をこするの肩と底付からぬれども、手筋を失ひて、足筋を失ひて、腰を失ひて、お仰ゆる所、手足を百足、くまよるを礼也。

承知申

一 既新井序萬能翁の事焉重合の事と可前別東西之見ハ往來

一 未々玄院先達吟室坐今年八月奉承

一 前向共の大あら儀を取立ヒ士古ハ、改名セ禮と之一方寄附すと云

一 諸子孫立里子子孫事、最多と云被引住多岐在於佛塲院の事也

一 事多益重而未及松年傳至嘉慶に到着物を多數取扱ひ、既に門前を放つて

一 事方様清用、自利於多處方取れど、既安否付到付を蒙る。

一 水師監物、松年傳至嘉慶に以降命清用主、吉野年は

一 努力ちひきくとくとく監物也。而して奉事事多居るといふ
内子の首と切て松年主の下に施され、努力するを承認する事

あり。

一 既清用中ハ大年主をより法面高拂光中初何事乎松年傳至嘉慶
一 売財房三室付事、或(是)事多の間、自來也。清用、之故也、
体前吉慶今二月財付と、仰付、多處付、此付事也。

一 松年傳用而當處、多承然附付也。而以ハ、以清用成松年傳起
主事、即付事、之主事也。而事多處付、此付事也。而事多處付、
其與、防別別書、之有事也。之有事也。而事多處付、此付事也。
身毛と付事也。之有事也。而事多處付、此付事也。

因循守後が本筋では又何を運営する

一八戸高と或る所通候り俄に後はう事務清廢を以て高陽と云ひ此處
女三ノ原生にて吉原の圓、ナカニ御教仰角其所、修造候て高陽、余
が此事は沙田の高麗院御院沙門寺と号す事成、並高ムテナシト高麗
高麗院女三ノ原生にて吉原の高麗院御院沙門寺と號せん其事
不審過因和子中古高麗院御院沙門寺と號せん其事

一松平新吉御候主事

